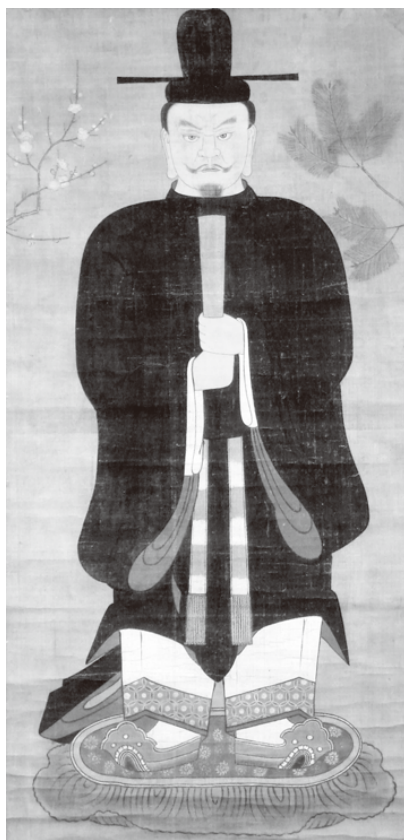


鴨東通信

春

2010.4 No.77



● シリーズ古都の近代 〈第3回〉

仁風扇

小林丈広

● てーたいむ

文化交流からよみとく一九二〇年代

川本皓嗣・上垣外憲一

● エッセイ

厨川白村という近代

工藤貴正

「日本こいしや」——袱紗に記されたジャガタラ文——

マルクス・リュッターマン

中世京都の研究者が現代京都に住んでみる

桃崎有一郎

ブログ・『狭衣物語』享受史論究

川崎佐知子

● 特別寄稿

中田雅博著「緒方洪庵——幕末の医と教え——」に寄せて

梅溪 昇

● 史料探訪

正岡子規筆「草花図」

上田一樹

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

【最新刊】

北垣国道（天保七年〜大正五年）は、京都府知事に就任した明治十四年から、北海道庁長官・拓殖務次官などを経て、隠棲した明治三十四年まで日記を書き残した。明治期地方官の実情を記し、京都のみならず中央政治史や地方自治・土木史・北海道史研究に寄与する資料。

その内容は伊藤博文・井上馨・松方正義ら藩閥政治家や府県知事、渋沢栄一・浜岡光哲ら実業家との交渉、琵琶湖疏水の建設、東本願寺問題の調停、北海道の開発などの経過を詳細に記録する。坂本龍馬が関わった北海道開拓計画や天狗党・長州藩内部抗争など幕末の政変についての回想、新島襄・大谷光勝・大谷光揚・永山武四郎・白仁武らとの小樽や札幌での活動、鳥取や高知・公家出身者、家族との交わりも心惜やかに描かれている。



北垣国道

明治期、

京都府知事・

北海道庁長官を

歴任した

地方官の日記

▼A5判・六四〇頁／定価一〇、二九〇円

◆塵海研究会 編集担当◆

小林 文広 京都市歴史資料館主任歴史調査員
白木 正俊 琵琶湖疎水記念館嘱託研究員
末岡 昭啓 住友史料館副館長
高久 嶺之介 京都橘大学文学部教授

明治期における

不敬事件の研究

小股憲明著

天皇を中心とする明治政府の誕生以来、数多く発生しながら体系的な研究がされてこなかった不敬事件を、明治期について網羅。豊富な実例を整理・検討することによって明治国家の特質を考察し、天皇制と教育の関係、ひいては天皇制と近代日本および国民の関係を明らかにしようとする大著。資料編として、二二八事例と十三参考事例の概要および参考文献を収載。

【最新刊】

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

おまのりあき：一九四七年生。京都大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程単位取得退学。現在、大阪府立大学人間社会学研究科教授。

みやこの近代

丸山宏・伊従勉・高木博志編

歴史都市・京都は、実は近現代に

大きく変わったまちであった――



『京都新聞』に平易な文体で連載された、「近代の歴史都市としての京都」について基本的な諸問題を多角的に論じた八五篇。京都大学人文科学研究所「近代京都研究会」の成果。

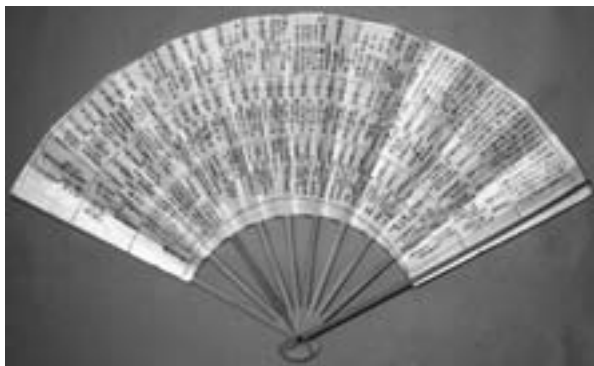
図版多数収録

【好評増刷】

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円

仁風扇

小林丈広



仁風扇(裏面の「施行鑑」)

ガンデイーの七つの大罪が話題になっている。国会で注目されたのは「労働なき富」だが、私が関心を持ったのは「道徳なき商業」だ。折しも、地球環境問題や雇用問題をめぐって経済界が果たすべき役割に期待が高まっている。近世後期の京都は、しばしば米価の高騰に見舞われたが、その都度、有力商人らが金穀を抛出して困窮者の救済にあたった。

嘉永三年（一八五〇）から四年にかけての飢饉では、心学講舎が、京都在住の有力商人から金穀を集め、市内各所で粥（かゆ）施行などの救済活動を展開した。このため、大坂では多数見られた餓死者が、京都ではほとんど見られなかったという。「仁風扇」は、この時に多額の金穀を抛出した有力商人を列挙した記録で、これまでも明倫舎や三井文庫などが所蔵するものが知られていたが、いずれも扇形の平面図を描いた刷り物だった。

近世後期には、飢饉の際に金穀を抛出した人名を列挙した記録がいくつも作られるが、扇形の絵は珍しい。そこで以前から扇に仕立てられたものを探していたところ、見つけることができた。出所は明らかではないが、所蔵者の斎木真氏（扇収集家）によれば、江戸時代のものに間違いないという。

仁風扇は、多額の金穀を抛出した有力商人に記念として配られたのではないだろうか。この扇の発案者は、救済活動に熱心で、商人らに人望があった平塚瓢斎（ひらつかひょうさい）ではないかと私は推察する。随筆家として知られる平塚を好事家ととらえる向きもあるようだが、「人格なき知識」（七つの大罪）とは一線を画す実践家だった。近世後期は、すでに社会の近代化が進行し、現代と同様の課題とその解決に向けての取り組みが始まっていたのである。

（こばやし・たけひろ 京都市歴史資料館）

●一九二〇年代を取り上げる理由

川本…大手前大学比較文化研究叢書は、二〇〇二年の『谷崎潤一郎と世紀末』から始まり、二〇〇八年の『阪神文化論』まで五冊を刊行してきました。

今年度から大手前大学大学院担当教授・交流文化研究所員として、上垣外憲一先生を迎えましたので、先生に第六冊目のテーマの発案をお願いしたところ、今回の『一九二〇年代東アジアの文化交流』という、斬新で刺激に富む、そして包括的な主題を提案してくださったのです。上垣外…一九二〇年代への関心は、今から三〇年ぐらい前にさかのぼります。筑摩書房の『明治大正図誌』というシリーズの『東京 三』を、僕の先生だった芳賀徹先生と前田愛さんとが共同編集をされたときに、執筆に際していろいろ調べたところ、田園調布の住宅地開発が大正年間にあたることを知った。つまり一九二〇年代なわけです。

今の田園調布は東京の代表的な住宅地です。それは、五島慶太^{ごとうけいた}という人が、東京急行電鉄という電車をひいて宅地を開発したことに始まります。芦屋や岡本が住宅地として開発されるの

ていーたいむ

文化交流からよみとく一九二〇年代

川本 皓嗣

(大手前大学学長)

上垣外憲一

(大手前大学教授)

も、やはり阪急電鉄、小林一三によってですね。東京と同時期に、関西では小林一三がターミナルデパートを作り、宝塚に劇場を作り、総合的な一種の文化産業ができた。東急、阪急は東西の代表的な私鉄ですが、同時に様々な文化を担っているわけです。

●東京から関西へ—モダニズムと伝統

川本…そして江戸時代にも、ちょうど元禄は上方中心で、明和・安永が江戸中心であるように、二〇年代は関西の文化的要素がすごく強い。

上垣外…明治というのは軍隊・戦争の時代で、完全に東京中心でした。ところが大正時代になって、国家目的である戦争、すなわち第一次大戦やシベリア出兵が終わって、平和の時代が来た。大阪はもともと武士の町ではないですから、平和の時代の産業は大阪で栄えます。大正期に、阪神が意味を持つ時期が来るわけです。川本…一九二三（大正一二）年の大地震で、東京が打撃を受けたこともあります。

上垣外…そう、たまたま関東大震災で、東京がつぶれてしまつて。谷崎潤一郎なんかまったくの江戸っ子だけれど、ある意味で仕方なしに

(笑) 関西にきた。それが象徴ですね。偶然であるけれどもそれだけではない。

二〇年代から三〇年代の文化状況を知るには、谷崎潤一郎の『細雪』^{さいゆき}を読むのが一番早いでしょう。入門であり終わりであると思います。

川本…谷崎は、急激な近代化がおこなわれていた東京から関西に行つて、古い日本の伝統や風景、風俗というものを見いだした、それを小説に記録したというふうに言われています。しかし、実は二〇年代はモダニズムの時代ですね。

モダニズムという国際的で、パリやロンドンが中心と思われていますが——事実そこからモダニズムは始まっていますが——事実は大抵、モダニズムが土着とぶつかるということです。

たとえば、アメリカで世界的な詩ができたのは実は二〇年代なのです。T・S・エリオットやウォレス・ステイプンズ、それからヘミングウェイのような小説家も、パリやロンドンで本物のモダニズムに触れて、自分の地元へ帰つてまったく違う土着のものとぶつかったとき、最高のものを生み出しています。

モダニズムの時代に、谷崎が伝統というものを関西に来て見つけたことは、世界的な流れか



川本氏

ら見ても面白いことです。

ずっと後の『癡癡老人日記』^{ふうふう}にせよ、モダニズムと伝統の、両方がぶつかっていると思います。谷崎は伝統作家のように言われますが、『吉野葛』でも、外国人のような眼で日本を見直すから書けるのであって、伝統にとっぴりつかっていないでできない作品です。

●東アジアにおける文化交流の歴史

上垣外…東アジアに着目したのは、今まで日本の比較文学は日本と西洋の関係を扱うことが多かったのですが、二〇年代の中国・

韓国を見ると、文化面できわめて成果が大きいのです。韓国は植民地支配下だし、中国は軍閥混戦の時代で、政治的には駄目な時代なのです。中国の近代の文学で、一番優れた作品が生まれているのは、間違いない二〇年代から三〇年代の前半ぐらいです。

韓国でも、特に詩の分野では三〇年代ぐらいまで傑作が多い。僕は個人的には戦争が終わった後、つまり韓国が解放後の詩は、二〇〜三〇年代を抜いてないんじゃないかとさえ思う。こゝは議論があると思います。中国みたいにははつきりしていません。

また、中国・韓国の文化は、日本との交流を

抜きにしては考えられないのです。たとえばアメリカとかヨーロッパに留学して、郭沫若^{かくもじやく}、郁達夫^{いたく}に匹敵するような成果をあげた留学生は、アメリカに留学した聞一多^{ぶんいちた}ぐらいで、圧倒的に日本留学生が多いんですよ。

川本…留学生たちは日本へ来て、どつぶり養分を吸いこんで中国・韓国へ持って帰った。新劇運動・恋愛・絵画・文学——新感覚派でもなんでも、みんな日本から入っていったんだけど、中国ではそれはないことになっている。直接パリに行った人もロンドンに行った人もいますから、そちらの系統で説明されてきた。日本を経っていないということが、中国と韓国においては大事だったんです。

上垣外…日本に行ったけれど、日本を学んだのではないと。日本に入っている西洋を学んだという論理ですね。つまり、日本に行つてトルストイを読んだとか。

川本…日本は西洋文化の輸入にものすごく苦勞していますよね。まったく異質のものを、なんとか輸入しようと思つて頑張っている先輩です。中国や韓国からすると、近代を勉強するのに直接西洋に行くより、日本を通して咀嚼されたもののほうがわかるわけです。

昔日本が中国を輸入するときも同様に、仏教であれ何であれ韓



上垣外氏

国による咀嚼を経て、ずいぶんわかりやすくなったと思うんです。たとえば韓国人が、中国語の漢文に直接ぶつかつて、ずいぶん苦勞したはずですよ。それを日本は受容することによつて学びやすくなった。地理的にも韓国のほうが近いし、少なくとも当初は彼らの手引きのもとで中国文明は入つてきた。それと同じで、少なくとも近代の西洋は、日本を通すことでなじみやすくなった面がとても強いのですが、最近までそれはある意味、ないことにされてきたのです。それをお互いによりやく、ということなんだか日本中心主義みたいだけれど、語り合うことができるようになってきました。

●一九二〇年代の交流が生み出したもの

上垣外…二〇年代がとくに面白いのは、日露戦争のころまでが中国からの留学生が一番多いのです。そのころは、国家として日本に学べ、追いつけという意識が非常に強い。ところが、大正期の中国人留学生も韓国人留学生も、比較的对等の立場という意識を持っていました。劣等意識があることはあるんだけど、たとえば上海は東京と比べてもどっちがモダンかわからないし、中華民国を新しくつくつたという意識もあります。

また韓国の知識人も、国として負けたかもしれないが、自分の

才能でいえば日本で有名な文学者に負けないという思いが強かった。だから、近代においては、影響ではなくて交流という言い方が一番できる時期なんです。

川本・巖安生という中国の学者によると、日本留学生には二種類あって、初めは魯迅のように、当時の中国を改革するために、日本で政治の仕方を学んで、さっさと実現したいというタイプです。それが二〇年代ごろになると、もっと日本に深入りして、例えば一高に行つて本気で勉強して、文学でも何でも日本人よりもよくできる人がいる。これが第二期です。そのかわりその人たちは、中国へ帰つてから政治的な動きに翻弄されて、ひどい目に遭うのですが。

上垣外・魯迅は今でも最高の評価をされています。それは間違いではないけれど、たとえば魯迅の弟の周作人は、永井荷風なんかと非常に波長が合うタイプです。政治的な問題のためにあまり評価されませんが、日本文化、江戸時代の芸術を非常によく理解しているという点では、魯迅以上です。それから郭沫若もそうです。彼は芸術至上主義者であつて、友人は戦後みな批判されました。自身はうまく変身して、共産党の幹部になりましたから生き残りましたが。

彼の友人の郁達夫なども、日本で活動した期間は非常に長い。日本との交流ということで考えると、歴史のなかで忘れられていったような人を掘りあげることができるし、その人たちに対する関心が最近非常に高まっています。二〇年代にいい仕事をし

た人たちは、最近中国でよく読まれるようになってきた。

川本・日本が乗り込んでいった時代は、両者の側から見て暗い要素が強いけれど、そのせいで、せっかく豊かな文化交流もあったのに、それがまったく無視される状況が続いてきました。語るごと自体が悪であるような、一種はざまに入つたようなところに、二〇年代があります。

東アジアは主として日本を通じて西洋・近代を学んだということとを先ほど述べましたが、二〇年代自体はどちらかというと影響関係というよりは交流関係です。本書で執筆者の皆さんが国際的に論じてくださっていますが、一九二〇年代について、少なくとも混じり合つていいものが出来た部分があることを、ようやく語れるようになってきました。政治的に用心しながらではなく、事実を率直に語り合うこと、これはとても意義のあることだと思います。

(二〇一〇年三月五日 於…大手前大学)

厨川白村という近代

—— 自著『中国語圏における厨川白村現象——隆盛・衰退・回帰と継続』を評す

工藤 貴正

北京大学教授の李強氏は、中国では厨川白村（二八八〇・一一・一九—一九二三・九・二）が「ニーチェ、ベルグソン、クローチエやフロイトとも肩を並べている」ほどの「世界級の学者」と称されているにもかかわらず、故国である日本ではほとんど忘れ去られた「学術存在」であり、「幽霊」であることを問題意識に持ち、同氏が上梓した『厨川白村文芸思想研究』（崑崙出版社、二〇〇八・三）の中で、「中・日両国にある厨川白村に対する評価の差異、このこと自体が大いに研究価値を有する課題である」と語っている。

本書の執筆動機は、この李氏の語った問題意識と同じところにあった。日本では、彗星のように現れ、大いに流行した厨川白村の著作が、彼の死後、急速に忘れ去られてしまいが、中国語圏（大陸・中国と台湾が中心）の知識人たちの間では、日本を代表する作家たち以上に知名度が高い。そのうえ、日本人の著作としては、群を抜いて系統的に翻訳され、しかも、時代を超えて各地域の特性に根ざして活き続けてきた現象を、私は中国語圏における「厨川白村現象」と称し、厨川がなぜ彼の如く高く評価されたのかを探ることを目指した。

本書は全体として足で調べて書いた、資料を重視した厨川白村に関する基礎的研究であり、論考の対象とした著作は『近代文学十講』『近代の恋愛観』『象牙の塔を出て』『苦悶の象徴』が中心であって、すべての著作を見通した厨川白村自体の研究とはいえない。私は、本書の中で、中国における厨川の著作の回帰と再評価の特徴は、単に西洋の「近代」を導入するための道具としてあったばかりでなく、マルクス主義・社会主義芸術論の浸透と通過により、厨川白村文芸論が文芸心理学（唯心論）と文芸社会学（唯物論）の合流・結合がなされた文芸理論として高く評価され、「厨川白村研究」「厨川白村文芸思想研究」という新しい語彙と領域が出現していることにある、と書いた。

なぜなら、一九八〇年代以降、中国において繰り返げられた厨川白村著作の受容の再燃現象の背景には、彼が提唱した二元論合一・統合の問題が大きな関心事としてあり、政治と経済という国家の根幹の場において二元論が許されるという現実のお墨付があるならば、マルクス主義・社会主義的文芸史観、いわば唯物論的な文芸史観が浸透していた八〇年代の中国において、三〇年代以

降に唯心論的であるとして批判された視点が再び統合されても、なんら不思議はないからである。

今回私が考察したのは、厨川著作の大陸・中国における隆盛・衰退・回帰の現象と台湾において継続する人気の現象の原因とその理由であったが、今後は日本でも厨川白村という対象自体を視座におく研究が必要となるろう。

鈴木貞美氏は『生命観の探究―重層する危機のなかで』（作品社、二〇〇七・五）の第七章「大正生命主義―その理念の諸相」で、厨川白村の『近代の恋愛観』（一九三二）を岩野泡鳴『神秘的半獣』（一九〇六）、木下尚江『懺悔』（一九〇六）などの「霊肉一致」の思想に属する大正生命主義の系譜に位置づけ、「厨川白村は、エレン・ケイらの思想に触発されて身につけた生命原理主義から当代の欧米思想を広く見わたし、それをギリシア哲学の霊肉一致論の今日的な再来と見なしているのだ。そして、この考えは、大正生命主義をゆるやかに総合するような知見であった」と結論づけている。さらに、鈴木氏は次のように厨川の『近代の恋愛観』を扱い、今後の研究に示唆的な問題意識を提起している。

それ（『近代の恋愛観』に描く）われらの生命は天地万象に普遍なる生命である」という意識――筆者は、人間の精神を高く見、肉体を低く見るキリスト教の教えが支配していた時代だけでなく、観念論と機械的唯物論とが互いに他を排斥しあう時代も終わりを告げ、それらをもろともに包む総合的な思想の時代が到来しているという認識によっている。その意味では、厨川白村『近代の恋愛観』は「近代の超克」思想のひとつと

いえる。

（鈴木貞美『生命観の探究』四八三頁）
厨川の文芸論（文芸思想）には、『象牙の塔を出て』『十字街頭を往く』『苦悶の象徴』など諸作に散見する、文芸や芸術が「生活のため」であると同時に「文芸や芸術のため」でもあるとする「二元論統一」の見地を示す特徴があり、これにここで鈴木氏が述べる、『近代の恋愛観』には「近代の超克」思想を察知できる特徴があるとする提言が加わることになるろう。

ところで近年、日本近代思想史の研究者である孫歌「竹内好という問い」（岩波書店、二〇〇五・五）や、二〇〇四年九月のドイツ・ハイデルベルク大学で「竹内好」を主題とし開催された国際シンポジウムと、これに招聘された加々美光行氏らによって開催された愛知大学主催の竹内好のシンポジウム（報告書『無根のナショナルリズムを超えて―竹内好を再考する』二〇〇七・七）、さらには子安宣邦『「近代の超克」とは何か』（青土社、二〇〇八・六）などにより、「近代の超克」とは、「アジア主義」とは、「世界史の立場」とは何だったのかを再考しようとする雰囲気がかき起きている。

竹内好が主張した「回心」型の近代は魯迅個人には当てはまってもアジアの原理全体に波及させるのは無理だと私は考えるし、むしろ日本にしても、西洋＝資本主義＝近代を一度は放棄し、現在急激に追隨している中国にしても、「ドレイ論」を視座とした「転向」型の近代でしかないと考えている。このような「近代の超克」論も視座に厨川著作の再読が望まれるが、そんな契機に本書がなることを期待する。

（愛知県立大学教授）

「日本こいしや」——ふくさ袱紗に記されたジャガタラ文——

マルクス・リュツターマン

茶やタバコの種などを始め、昔から稀な舶来品が入港した平戸には袱紗に書き留めた女性の筆跡が伝わっている。宛所も差出書あてしころ さしだしがきも記されているので手紙の様式だ。

日本こいしや、。かりそめにたちいでて又とかえらぬふる／さと思へば心もころならずなみだにむせび、めもくれゆめうつつとも、さらにわき／まえず候へどもあまりのこと
にちやづつみ一つしんじまいらせ候。あらにほんこいしや、、、／こしよろ／うばさままい旨る（／で改段）

平戸オランダ商館は寛永一八年（一六四一）に長崎出島へ移動するが、その二年前にはオランダ人に嫁いだ日本人の妻とその子の追放令が發布された。この時帆船に乗った日本人の妻や混血児がジャガタラ（現インドネシアのバタビア）から送った国際便をジャガタラ文という。現在、五通が伝わっている。その一通が木田家所蔵のこの袱紗文。外形を見るに、絹の小切れが木綿（おそらくインド製）の布（約二センチ四方）の裏に市松状に縫い合わせられている。左下の中ほどおよび右端に同じ切れ地の紐も付いているし、何かを包むようにできているので、この面が表とし

て仕立てられていることは明らか。そして散らし文めかしつつ、小切れのコマ毎に右中から左下へ三段にわたって丁寧な仮名が綴られ、左端に差出人の名。ついで二段目の上端に弾んで、宛書で結ばれる。差出人は一般的にコシヨロと読まれているが、あるいは「こしより」とも読むべく、「コシ」という名なのかも知れない。いずれにしても、稀有な形態から、本物のジャガタラ文ではないという疑念の声もある。なぜなら、仮名文字はあまりにも教科書通り、それに言葉はやや抽象的で、好もしくない艶たる響きが目立つからだ。

江戸時代後期の記録によれば、文政二年（一八一九）に木屋藤右衛門という町人衆が松浦家へ呼び出されて調査をうけた。木屋家の祖先の「何某之娘」が「南京」（ここでは外国の意）へ嫁入りして、はるか彼方より品々を送り、その道具類の大半は方々に散佚したものの、書付けの袱紗が残っていると、木田家老母の咄はなしが語り継がれていたという。だとすれば、前記の袱紗をさすかも知れない。まさに贈答品の茶包みに添えられた一筆書きではなかっただろうか。

ちなみに右の記録によれば、同じく町人衆の谷村家の反古のうちよりも一状のジャガタラ文が出てきた。これは平戸に伝わる五通のうち、おそらくは六兵衛の後家と名乗るフク署名の目録（和紙ではない折紙）一通をさすと思われる。これは谷村家の譜代下女をつとめていたフクの手紙と断定できる。同様の目録は他に二通、オランダ東インド会社に雇われていたピータ・クノルの女房コルネリア署名のものが伝来している。目録というのは贈り物を列挙した手紙をいう。これらの三通も、誰々に更紗何反・木綿の反物・龍腦何斤などを配るといった内容で、ひいてはコシの袱紗も小さい目録ではないか。

「一筆啓上 火の用心 お仙泣すな 馬肥やせ」にちなんで丸岡城で歳々募集される「日本一短い手紙」や年賀状のように、たとえ短くとも、本人の音信を望む習慣は根強い。作文は教養と経験の違いによって表現が異なるが、拙い文章でも送る必然は生じる。あるいは早く子供にもお祖母ちゃんへ幼い文章を書かせたい親も沢山いるだろう。コシが往來物のような散らし書きを心掛けたのもそのためか。

一方、普段はなかなか使われない文句も注目に値する。日本という国名はきわめて抽象的だ。また「こいしや」として、「艷書に似たる文言書くべからず」という理も守られていない。しかし、国名は琉球や海外に往來した書簡ならではの文句で、さほど不思議ではない。たとえば西川如見著『長崎夜話草』で知られるハルも友人に「あら、日本こいしや、ゆかしや、見たや、」と。

ここで、袱紗文の差出人は同性の親しい姥に書いたと考えて、さほどの違和感はない。なおかつ、女房言葉と付け文の手習いを基本にしたハル等の姿にも訳はある。長崎で奉公して、毛唐人についてオランダに移住したフミことアンナ（『真佐喜のかつら』や「花の世界」に生まれ育ち、遊廓の文体を学び、それ以外の表現の術を身に付けられなかった人々を考えれば、コシもまた、母親が手習いをさせ、姥へ直の言葉を遣わせたものではあるまいか。

手習いのほど丁寧な袱紗文はもしかすると外来ではなく、ジャガタラ文を題材にして国内で作成された遊び文、パロディか、という疑念も生じがちだが、ただの遊びとするのはいかがか。たとえばコルネリアは四人の子の息災を報じた上、年長の二人の「ぢ、さまうばさまへ」と添え筆をし、しかも、兩人から大切な印として「おらんだ布二反」を進上している。このような史実を見れば、袱紗文を振りや一種の「偽物」とする意見は出てきても、むしろ同じ状況から生まれた実物の手紙である可能性が高く推されよう。

某母が用意した贈り物に幼い手による文を添え、お茶の筒を布に付いている紐で結ぶという棕櫚の木蔭での姿もさほど想像に難くない。お祖母さんがアッサム茶を入れて、平戸の港や沖を観渡す様子を思い描きながら、はるかに思いを馳せただろう。私にはどうしてもこう思われてやまない。

（国際日本文化研究センター准教授）

中世京都の研究者が現代京都に住んでみる

桃崎 有一郎

京都に転居してから一年が経つ。研究対象とするフィールドに居を構えることには、研究者としてこの上ない魅力がある。その上、奉職した立命館大学で与えられた仕事が「京都学」の授業であり、しかも足利氏に強い関心を抱く私の研究室は、窓を開ければ眼前に足利氏の菩提寺^{とうじいん}等持院があるのだから、最も幸せな環境を与えられたことになる。私は嬉々として京都に赴任した。

しかし中世京都を探る目で現代京都を見た時、戸惑いを覚えたことは否定できない。京都の神社・仏閣などは、その歴史自体は古くても、国宝・重要文化財の建造物でさえ近世以降の建築が多く、所在地も中世までとは変わっているものが多い。また応仁の乱頃までを主な関心対象としてきた私にとって、質・量ともに法華宗（日蓮宗）の寺院群が存在感を放つ現代京都の景観も、戦国以前との断絶を感じさせる。さらに現存するいわゆる京町屋は大部分が近代以降の建築であり、近世に遡るものさえまれである。

町人による自治の代名詞ともいべき京都の「町」もほとんどは戦国期以降に誕生し、『冷泉町記録』や『大運院文書』を見ると、京都の町々の住民は少なくとも一度、織豊期（信長・秀吉の

時代）にほとんど入れ替わっており、明治維新後の東京^{とうきょう}京都で天皇と大部分の旧公家が東京に去った今日、真に「昔」から京都に住んでおられる家系は冷泉家だけではないかとさえ思う。そして京都御所は江戸幕府が学問的考証をもとに造営した復原模型であり、御所を含む巨大な京都御苑は豊臣秀吉が公家衆を集住させた公家町の跡であって、一町（約一〇九メートル）四方に過ぎない内裏と公家衆の邸宅が散在中世洛中の面影は見るべくもない。平安く室町の痕跡を探す私にとって、有り体にいえばそのような京都の印象は、中世が終わりを告げる時期以降に形成された新しい町であった。その結果、六〇〇年前の京都の知識があまり役に立たないことに、私は困惑した。平安京の中心^{すざく}朱雀大路が千本通りと名を変えて市街地の西の外れのようになってしまうことは、中世からのことであるから面白い。しかし平安期から戦国期まで保たれた上京・下京の街路名の多くが変わってしまった上、秀吉が新設した短冊形地割に代表される、平安京の条坊の基本単位たる一町間隔に満たない新街路が多く開発された結果、頭の中の六〇〇年前の地図と現代京都が重ならないので

ある。三条坊門・万里小路東頼といわれればイメージが湧くが、

今の蛸薬師通り柳馬場東入がどこなのかイメージが湧かない。

とはいえ、当初は浦島太郎のようで不便に感じたこのようなことも、今では現代・中世京都を知る大きな手がかりと感じている。

というのも、ある事物のアイデンティティを決める最大の要因の一つがその事物の「構成」にあるとしたら、一八〇〇あるといわれる「町」やその名前といい、また通り名といい、現代京都の

(そして「歴史的」京都の)アイデンティティを決定する契機は戦国・近世初期にあった可能性が見出されるからである。一二〇〇年以上に及ぶ京都の歴史の中で、現代京都の原点がその時期であることは、恐らく自明ではない。一般に、地名は意図せずとも化石のように長期間保存される傾向が強い上、京都は特に歴史や文化に対する住民の意識が高い土地であるのに、数百年用いられてきた通り名が中世末・近世までに変えられてしまっていることなどに、最近では強く興味を覚えている。

他方、大枠では中世と変わっていない地理的特性を体感し、少なからず残る歴史的地名の中で生活できる魅力は、私にとつて大きい。今の住居を決めた最大の理由は勤務先への利便性であったが、もう一つの決め手は、マンション名に「今出川」住所に「今小路町」とあるという、極めて中世京都らしい地名に惹かれたことであった(もつとも、どちらも中世とは場所が異なるが)。また平安京条坊の一区画が一町＝一〇九メートルであることは知識として知っていたが、「このコンビニの交差点からあそこの銀行

の交差点までが一町」と体で覚えられると、格段に距離感覚が違ふ。あるいは九条の東寺から、その五重塔の頂点と同じ標高にある北野天満宮付近(一条以北)の自宅まで自転車帰ると想定外の辛さで、平旦に見えた京都が思った以上に傾斜しているという生活実感を得た(特に丸太町通り＝春日小路以北が甚だしい)。

こういった中で目下関心があるのは、中世京都の住民と現代人との、地理感覚の差異である。そもそも彼らはどの程度の距離を近いと感じ、遠いと感じたのか。記録によれば、公家衆にとつて数百メートル歩くのは「遠い」らしいが、同じく記録によれば、彼らのような貴人は道を「歩く」ような卑しい行為自体を避けるべきであったというから、現代人とは根本的に感覚が違う。

足利義満期以降の室町幕府(将軍が朝廷をも支配して公武統一政権といわれる)は、京都にあるからこそ意味のある幕府であった。しかし八代義政は夫人日野富子との同居に嫌気が差して長谷や東山に住んだ。そこは「洛中洛外」という一体的空間の中なのか、それとも「京都(洛中)の外」＝「外部的空間と認識されたのか。さらに義尚・義晴・義輝らは近江国(滋賀県)に長期滞在したが、なぜ彼らはしばしば京都を脱し、何かと近江に拠点を作ろうとするのか。夫婦関係や戦乱からの逃避のために、近くて遠い洛外や近江に住むのはわからないでもないが、では執政意欲が衰えない義満が北山の山荘(いわゆる金閣寺)を短い期間日本の中心的政庁とした時、彼は北山と洛中の距離に何を表現しようとしたのか。興味は尽きない。

(立命館大学講師)

ブログ・『狭衣物語』 享受史論究

川崎 佐知子

○平成九年八月一日 快晴

長崎県にある島原図書館松平文庫の調査に出かける。早朝、東生駒の実家より出発。まだぐっすり眠っているヨウコを起こして、しばらく戻らないので、おばあちゃんと留守番して待っているようにと言い聞かせる。伊丹空港から長崎空港へ。「ハウステンボス方面」にやや心惹かれながら、島原行きのバスに乗り込む。

昼すぎ、現地に到着。今晚の宿泊先「あじさいイン島原」に立ち寄って荷物を預けてから、図書館に向かう。予め申し込んでおいた『さごろも』・『狭衣系図』・『下紐』を閲覧する。装訂から、『狭衣系図』と『下紐』がツレであると判断して、調査に取りかかる。冊数と寸法、綴じ方を見たあと、表紙と外題、本文料紙など、ひととおりを確認する。

閉館時間で退出する。まだ明るいので、周辺を散策する。空気がおいしい、水のきれいな土地だと思う。商店街の食堂にはいる。少し前まで、ひとりで外食するのはひじょうに抵抗があった。歳をとって性格がずうずうしくなったのか、それとも、家事一切からの解放感なのか、恥じらいよりも食欲を優先するようになった。

他人に作ってもらう御飯は、なによりおいしい。好奇心から、郷土料理「具雑煮」を注文するが、暑い夏には聊か不向きだったかも。

夜、頃合いを見計らって、実家に電話を入れる。ひとしきり、ヨウコの他愛ないおしゃべりを聴く。出発の二、三日前から実家に泊まり、十分に慣らしてからバイバイする作戦が功を奏したようだ。その報告と無事着いたことを知らせるため、京都の家にも連絡する。ひさしぶりに主人と長電話。

○八月二日 晴れ

朝、開館時間と同時に入館する。昨日と同様、書誌を調査する。『下紐』には、例の昌琢本と玄仲本を書写したとする識語があった。同じ識語を持つ彰考館蔵本とはほぼ同文のようである。帰宅してから全文の校異をとるため、複写の手続きをする。『休聞抄』・『玄旨紹巴昌叱百首付宗砌田舎への書状』・『秀次亭行幸和歌』も閲覧する。いずれも松平忠房の蔵書だが、これらが蒐集されるに至った事情を知りたいと思う。

基本的に、調査のあいだは昼食はとらない。限られた時間だと

思うと、少しの間も惜しい。というか、おもしろい資料にめぐりあったりすると、ついつい忘れてしまっている。貴重書の閲覧は大抵午後四時終了で、そのあとは特別にすることもないので、苦にはならない。

閉館間際、目録をおさらいしていて、『讃岐入道顕綱集』を発見した。伊井春樹先生の今年度大学院演習のテーマで、ちょっと気になる。調査は今日で終わり、明日は一日移動の予定だったが、午前中だけ閲覧させてもらうよう頼み込む。

図書館を出て、また散策する。明日に備えて、島原鉄道の駅の位置を確かめる。おみやげを探す。「びわゼリー」があるが、ヨウコは果物全般を受け付けない。とくにフニヤフニヤな食感が苦手のような。食べ物の好き嫌いは大変困るけれど、いずれ成長すれば好みも変わるだろうと鷹揚に構えている。しつぺを理由に口うるさく言うべきなのかもしれないが、それだとこちらの身が持たない。「雲仙の普賢岳噴火まんじゅう」が目にとまるが、やめておく。

○八月三日 晴れ

『讃岐入道顕綱集』を閲覧する。列車の時間ぎりぎりまで本文を写す。墨付き全一六丁のうち、九丁オモテを書き写したところで時間となる。カメラを持参すればよかったと後悔する。事前のリサーチが手ぬるかったのだ。辛うじて、自分の演習担当部分はメモをとることができた。

島原鉄道で諫早に行き、特急かもめに乗り替えて博多へ向かう。

○八月四日 晴れ

九州大学で、狭衣関係の資料を調査する。まず、国文学資料室を訪ね、室町物語『狭衣』の閲覧を申請する。大学の附属図書館を通じて連絡してあったはずだが、所在不明を告げられる。当てがはずれて残念ではあるけれど、このような空振りもたまにはある。気を取り直して附属図書館に移り、頼んであった資料五点を出してもらう。細川文庫の『狭衣物語』二種と『狭衣系図』、支子文庫の『下紐』（版本）、音無文庫の『狭衣抄』である。国文学研究資料室のマイクロフィルムになっている細川文庫本の書誌確認が目的だったが、音無文庫の『狭衣抄』が猪苗代兼寿『狭衣物語抄』だったのは意外な収穫だった。

複写の申請をしてから、許可を得て図書館のカードを繰る。訪書先では調査カードを拝見するよう心がけている。目録として公表されているのとはべつに、有益な情報が記録されている場合が多いからだ。音無文庫の『狭衣抄』のカードに、「寺田寿」旧蔵と「贗庫」の捺印が殊更に注記されていた。

早めに切り上げて、博多駅に急ぐ。閲覧者の勝手な要求にもこころよく応対し、的確なアドバイスまでくださった諸機関の方々に頭が下がる思いがした四日間だった。

京都駅で母と待ち合わせ。ベビーカーのヨウコは「どちら様ですか？」という顔つき。こんな生活が長続きする筈はないと思う。

(佛教大学・立命館大学非常勤講師)

本書は、著者が先年産経新聞紙に連載して大きな反響があった「適塾再考」を、本年が適塾の主宰者緒方洪庵の生誕二〇〇年を迎えるにあたり、全面的に改訂増補して世に問われたもの。洪庵については、戦時中の、足守出身で大毎編集局長だった浦上五六の『適塾の人々』、および洪庵曾孫の緒方富雄の『緒方洪庵伝』が昭和全期にわたり古典的名著で、そのほかには何も刊行されていなかった。

本書は、その内容から申してこれまでの研究成果を全吸収し、第一線の文化部記者として豊富な内外の情報・学識をバックに検討を加え、諸問題をかかえる内外の現代人に緒方洪庵なる人物の再認識を世に問うた名著というに憚らない。

あの幕末の政治・経済・思想・社会・文化などの各方面で非常に厳しい圧迫や制約下でありながら、医療をもつて人々の病苦を救済しようとする思想を生涯を貫く人生観として、医学者・医者また教育者として種痘の普及、コレラの治療に努め、多くの人材に大きな足跡をのこした洪庵の生き方を二一世紀を生きた自分たちの生き方の指針として受け継ぎ、強く生き抜く力を享受すべきであるというのが、著者の心底であろう。

本文はさすがに記者だけに、読者に硬い史料の原文引用もなく、読みやすい。しかも洪庵が、通常の医学者でなく、修業時代から医学のほかに、天文・物理・薬学・薬品を勉強していたことにふれており、今日の大学の医学部の教育、医者への調剤

特別
寄稿

中田雅博著

『緒方洪庵—幕末の医と教え—』に寄せて

梅 溪 昇

(大阪大学名誉教授)

ばなれに問題を提起しているように、素人の筆者には思える。また、幕末の著名な蘭医学者の中にあつて、洪庵だけが西洋の名医フーフェランドの「医師の義務」に共鳴してみずからの日本語の名文でのこした医戒一二カ条を当時の世相下に明らかにして、現代の医学界にもわれわれにも心すべき教えであると強調している。洪庵の取り扱った当時の医学は既に過去のものとなっているが、この医戒によって洪庵は現代に生きている。とくに、読者に本書が、この洪庵の医戒一二カ条の英訳を初めて掲載していることを看過されないようおねがいする。これは、筆者が長年にわたり渴望していたことで、適塾の見学や、蘭学の母国オランダのライデン大学などでの洪庵研究の外国人のために大いに役立つことは明らかで、なお本書も近いうちに英文で刊行され、海外にて広く読まれるように著者に衷心期待する次第である。

適塾は唯一現存する蘭学塾で、大事な文化財・史跡である。史跡はそこを訪ねてこそ、当時の洪庵や福沢たちの語る興味ある物語に聞き入ることが出来る。そのためには、ぜひ本書を一読しておいてほしいものである。

おわりに、研究者にとつても、本書の註記は最新の研究成果である。また適塾生一覧は、緒方富雄編『緒方洪庵 適々斎塾姓名録』の人名の読み違い、また筆者も関係した適塾記念会編『都道府県別適々斎塾姓名録』の誤りをそれぞれ全面的に訂正したもので、これまた、現段階での最新のものである。

史料

探訪

40

正岡子規筆「草花図」

松山市立子規記念博物館学芸員

上田 一樹

松山市立子規記念博物館は、郷土の文学者・正岡子規について紹介した文学系博物館である。昭和五六年（一九八一）四月に開館し、子規や周辺人物の資料を基本として、松山の歴史文化に関する資料を広く蒐集・公開している。常設展示では「人間正岡子規」をメインテーマに、Ⅰ. 道後松山の歴史、Ⅱ. 子規とその時代、Ⅲ. 子規のめざした世界、のコーナーを設け、子規の等身大の姿に触れていただくことを目的としている。

近年、子規を主人公の一人に据えた司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』が改めて注目され、子規の精力的な文学活動や秋山真之との心温まる交流が全国に知られることとなった。また昨年の七月には、長年実物の存在が知られていなかった子規の自筆選句集「なじみ集」が発見された。「なじみ集」は幸いにも多くの方のご理解とご協力を得て、現在は当館の所蔵となっている。「なじみ集」の本格的な調査研究は始まったばかりであるが、ここには子規に「なじみ」のあった人々の俳句が数多く収録されており、新出句ならびに子規山脈の再構築が大いに期待される。今後の子規研究に一石を投じる極めて貴重な資料といえるだろう。

さて、今回紹介する資料は子規の筆による「草花図」である。軸装されており、本紙の大きさは縦六一センチ、横三〇センチ。現存する子規の画の中で最大級のものである。草花の水彩画に俳句が添えられており、左下に当時の子規の状況が次のような短文で記されている。

明治卅四年四月廿五日

此日珍ラシク苦痛少ケレバ左向ニ

寝テ頭ヲ枕ニツケタルマ、写生ス 規

文章からわかるように、本作を描いたのは明治三四年四月二五日。子規は翌年九月一九日に三四歳と一ヶ月で亡くなっており、最晩年の作ということになる。子規の晩年は、彼が二十代前半から思っていた結核との凄絶な闘いであった。二九歳のころには結核菌が脊椎に達し、やがて立つことも寝返りを打つこともままならなくなる。子規は間断なく襲ってくる激痛に耐え、死の恐怖と闘いながら文学活動を続けたのであった。

子規はこれだけの大作を成すために、かなりの時間を要したことであろう。しかも病が悪化していた子規は、この画を左向きに



子規筆「草花図」
(松山市立子規記念博物館所蔵)

よう。画は花瓶に活けられた草花を写生したもの。後述する俳句からそれらに沈丁花、青麦、大根が含まれていることがわかる。花瓶は丁寧な色を塗り重ねており、重量感を感じさせるものである。また、立体であることを意識して三本の脚が描かれているところも、「写生」を重んじた子規らしさを垣間見せている。草花は総じて淡い色遣いではあるが、葉の濃淡や麦の穂先など細部にまで筆が行き届いていることが看取できる。

画とともに記された俳句は全部で十句。以下に読みをあげる。

写生して病間なり春一日

沈丁や麦や大根やつかみさし

青麦に床几立てたる写生哉

寒食の里や大根の花盛（*明治三十二年初出）

大根の花さく彼岸日和かな

我庭にはじめて咲ける牡丹かな

パン売の太鼓も鳴らず永き日や（*明治三十四年四月十六日初出）

人に迫る沈丁の香や手水鉢

筍に虫歯痛みて暮るゝ春

青麦に山も見えさる地形かな

いずれも子規の特長がよく表れた平明な俳句である。体の具合のことや目に映る草花のこと、近所を通るパン売りのことなどが

寝て頭を枕につけた状態で写生した。一時的に苦痛が和らいでいたといえ、その精神力と本作にかけた熱情には驚きを禁じ得ない。

子規の絵に対する興味は幼少期に端を発しているが、「三二歳ごろに画家の中村不折から画材道具を貰い、以後水彩画への傾倒が著しくなる。それは「僕に絵が画けるなら俳句なんかやめてしまふ。」（「画」明治三三年）と語るほどであった。また、死の二日前まで新聞「日本」に連載した随筆「病牀六尺」^{（ひょうしょうろくしちやく）}には、「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造花の秘密が段々分つて来るやうな気がする。」（明治三五年八月七日）とも記しており、子規が草花を描くという行為と冷静に向き合いながら、写生の深奥に迫ろうとしていたことがうかがえる。

当時の子規の状況について概観した上で、改めて本作を見てみ

身辺雑記のように記されている。わずか六尺の病床から、五感を存分に働かせて句作した子規の息遣いが聞こえてくるようである。なお、俳句にはすでに発表されたものも含まれているが、これは子規が本作のために適切な句を選んだある種の「演出」と思われる。また彼は句の配置にも腐心したようであり、程よく散らして書かれた俳句の美しい筆跡が草花の画を引き立たせ、華やかさを持ちながら滋味に富んだ作品となっている。

ところで、子規はその晩年、親友の夏目漱石に東菊の水彩画を贈っている。最後に、漱石がその子規の絵を見て記した文章をあげておきたい。

子規は此簡単な草花を描くために、非常な努力を惜しまなかつた様に見える。僅か三茎の花に、少くとも五六時間の手間を掛けて、何処から何処迄丹念に塗り上げてゐる。是程の骨折は、たゞに病中の根気仕事として余程の決心を要するのみならず、如何にも無雑作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。 (子規の画) 明治四四年

気の置けない友人らしい、正鵠^{せいこく}を射た一文である。漱石の言に洩れず、この「草花図」も、俳句は読み手の追体験を効果的に促しながら、至極無造作に作られている。比して画に関しては、眼前の草花の様子を伝えようとする丹念さが滲み出ており、童のような子規の熱心さが伝わってくる。この冷静と情熱、ある種の器用さと不器用さの対照が「人間正岡子規」の大きな魅力であった。「草花図」はそれをよく表したものの一つといえるだろう。

— MEMO —

松山市立子規記念博物館

愛媛県松山市道後公園1-30

Tel. 089-931-5566

ホームページ

<http://www.city.matsuyama.ehime.jp/sikihaku/>

- ・伊予鉄道「道後温泉駅」より(徒歩)・・・5分
- ・JR松山駅より(電車)・・・所要約20分
- ・松山空港より(バス)・・・所要約35分
- ・松山観光港より(バス)・・・所要約45分
- *電車・バスは各始発から道後温泉行にご乗車下さい
- 観覧料 個人400円 団体320円(20名以上)
- 高校生以下無料

常設展示室3階特集コーナー

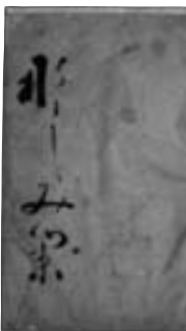
9月5日(日)

「特集 子規の先生たち」

*子規が教えを受けた漢学者や学校の先生たちの資料を公開

【お知らせ】

○平成22年4月末より、子規選句集「なじみ集」に関連した特別展を行います。



「なじみ集」表紙

書評・紹介一覧 11～2月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
明治前期の教育・教化・仏教	茶の湯文化と小林一三	
(紹)『立命館史学』第30号(藤野真拳)	(紹)『月刊美術』第412号	
近代京都研究	春秋 京大和翠紅館	
(評)『人文学報』第98号(中島節子)	(紹)毎日新聞 12/6(田辺佑介)	
徳川將軍家領知宛行制の研究	東アジアのなかの日本	
(評)『歴史学研究』第862号(大野瑞男)	(評)京都新聞 12/6(仲尾宏)	
朝鮮近現代史を歩く	原三溪翁伝	
(紹)『日本歴史』第741号	(記)神奈川新聞 12/27(尹貴淑)	
熊本藩の地域社会と行政	(記)神奈川新聞 1/27(社説)	
(評)『日本歴史』第741号(松沢裕作)	(記)日本経済新聞 2/4	
立憲国家中国への始動	瑞泉寺史	
(評)『中国研究月報』第744号(李曉東)	(紹)中外日報 12/17	
神社継承の制度史	悟溪宗頓 虎穴録訳注	
(紹)『悠久』第118号	(紹)中外日報 1/14	
九州の蘭学	情熱の移植医	
(紹)『日本歴史』第739号	(紹)大分合同新聞 12/6	
禁裏・公家文庫研究 第三輯	京都 芸能と民俗の文化史	
(紹)歴史学研究 第863号(中村友一)	(記)京都新聞 1/1(箕浦成克)	
松前景広『新羅之記録』の史料的研究	革新の書人 河東碧梧桐	
(紹)『北海道史研究協議会会報』第85号(川端裕介)	(記)毎日新聞 1/6	
キリシタン大名の考古学	(記)四国新聞 1/29	
(評)西日本新聞 2/28(安部龍太郎)	近世長崎司法制度の研究	
緒方洪庵	(記)長崎新聞 2/14	
(紹)『ヒューマンサイエンス』第20巻1号		
(評)『日医ニュース』第1162号		

11月から2月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
原三溪翁伝	藤本實也著	1476-1 C1023	16,800	11
瑞泉寺史	横山住雄著	1487-7 C1015	21,000	11
茶の医薬史(2刷)	岩間真知子著	1463-1 C3077	9,450	11
禁裏本歌書の蔵書史的研究	酒井茂幸著	1483-9 C3091	5,880	11
情熱の移植医	谷澤忠彦著	1493-8 C0047	1,680	11
京都 芸能と民俗の文化史	山路興造著	1484-6 C3039	7,875	11
悟溪宗頓 虎穴録訳注	芳澤勝弘編著	1489-1 C3015	10,500	12
象徴天皇制の形成と定着	富永望著	1492-1 C3031	5,040	12
革新の書人 河東碧梧桐	島田三光著	1488-4 C1071	5,250	12
中世前期女性院宮の研究	山田彩起子著	1496-9 C3021	5,880	12
くずし字辞典(5刷)	東京手紙の会編	1024-4 C0521	6,300	12
平安京とその時代	龍谷壽・山中章編	1497-6 C3021	9,450	1
西村茂樹研究	真辺将之著	1491-4 C3012	8,190	1
近世長崎司法制度の研究	安高啓明著	1477-8 C3021	5,985	1
『狭衣物語』享受史論究	川崎佐知子著	1486-0 C3091	12,600	2
中国語圏における厨川白村現象	工藤貴正著	1495-2 C3098	6,300	2
北垣国道日記「塵海」	塵海研究会編	1499-0 C3021	10,290	2
中世京都の空間構造と礼節大系	桃崎有一郎著	1502-7 C3021	7,560	2

11月から2月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
シリーズ古典再生	2	2	日本の心と源氏物語	1412-9 C1091	1,890	11
住友史料叢書	24	24	銅座方要用控二	1494-5 C3321	9,975	1
大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書	17	17	東アジア経済史研究 第1集	1498-3 C3022	4,200	2

(表示価格は税5%込)

営業部より

▼インターネット書店のアマゾンで、小社刊行図書の中身を見ることができます。共同論文集以外の単著を、新刊から順次さかのぼって登録しています。ぜひご覧下さい。さあこれで売上は伸びるのか！乞うご期待。(h)

☆フェア情報

岩瀬書店富久山店(福島県郡山市)

「春の歴史書フェア(歴史書懇話会協賛)」

5月中旬まで

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

史学研究会(京都大学)

4/17(土)

美術史学会(学習院大学)

5/21(金)~23(日)

歴史学研究会(専修大学)

5/22(土)・23(日)

芸能史研究会(同志社女子大学)

6/6(日)

日本医史学会(茨城大学)

6/11(金)~13(日)

アジア政経学会西日本大会(京都大学)

6/12(土)

社会経済史学会(関西学院大学)

6/19(土)・20(日)

茶の湯文化学会(名古屋文化短期大学)

6/19(土)

日本宗教文化史学会(京大会館)

6/26(土)

大阪歴史学会(関西大学)

6/27(日)

編集後記

▼遙か昔から互いに影響し合ってきた東アジアと日本。外見や風俗は似ていながら、同時に異国でもあります。異なる文化が幾度もぶつかり、「化学変化」を繰り返して現在の日本文化があることを、川本・上垣外両先生のお話を伺って改めて実感しました。(N)

▼いつもお洒落で可愛い川崎先生。二兄の母として育児と研究に励まれる真摯な姿を尊敬します。昨年の小社美術館の神谷美恵子さんの展覧会でも、女性が家庭と仕事を両立することについて考えさせられました。(W)

▼最近はやりのツイッター。もともとネット空間に興味津々の私は手を出そうか出さないか迷っています。他の出版社では営業活動の一環としてすでに使用している社もあるとか。まずは気軽に試してみたいですね。(I)

▼桃崎先生が書かれている京都の地割の変化。現在の地図に平安京を重ねた『京都源氏物語地図』があれば一目瞭然です。ただし残部僅少・美本なし。今すぐご注文下さい。(M)

▼現在一〇年前の業務システム入替中。数年前に導入した端末も挙動不審。Googleなる黒船来航と思いきや、元々征西。頭叩いて響くのは、昔日の文明開化の音ばかり。(江)

▼表紙図版「東帯天神像」(個人蔵)／太子信仰と天神信仰より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.77

2010(平成22)年3月31日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷲草デザイン事務所

『狭衣物語』 享受史論究

さごろもものがたり
川崎佐知子著

【最新刊】

『源氏物語』に並称された平安朝後期物語の傑作『狭衣物語』の受容の様相を文献学的見地から徹底的に分析検証し、連歌師紹巴が天正18年に著した『狭衣下紐』を享受史の中核に位置づけた。未紹介資料5種を全文完全翻刻掲載。物語文学研究の新スタンダード。

◎内容◎

緒言(伊井春樹)

【論文篇】

里村紹巴と『狭衣物語』

三条西実隆『狭衣系図』の諸問題

猪苗代兼寿の『狭衣物語』享受

『狭衣物語』享受の周辺

【資料篇】

翻刻・陽明文庫蔵近衛尚嗣筆外題『狭衣下紐』

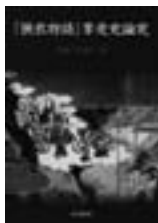
翻刻・陽明文庫蔵近衛信尹筆外題『狭衣下紐』

翻刻・陽明文庫蔵近衛尚嗣筆『狭衣系図』

翻刻・東京大学総合図書館南葵文庫蔵『狭衣系図』

翻刻・宮城県図書館伊達文庫蔵『狭衣物語抄』

▼A5判・六五〇頁／定価二二、六〇〇円
かわさきさちこ：大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、佛教大学・立命館大学非常勤講師。



禁裏本歌書の蔵書史的研究

酒井茂幸著

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、同時代の公家日記や古歌書目録類を援用しつつその伝来の歴史を跡付ける。また、禁裏における歌学や古典文学の注釈・講釈に注目し、古典学の変遷を叙述する。中世後期以降、歴代天皇がどのような歌書を求め、書写・収蔵していったかを明らかにする。

▼A5判・三四四頁／定価五、八八〇円



くしゃろんおんぎ 俱舍論音義の研究

西崎亨著

【5月刊行予定】

『俱舍論音義』は、唐の玄奘三蔵の『阿毘達磨俱舍論』30巻と唐普光撰の『俱舍光記』三十巻を巻第一より交互に配し、各々の書から難解な単字や熟字である漢字を抽出して、その音・訓について註釈を加えた巻音義。掲出字に付された和訓は語彙資料として有用であり、またその和訓には多く声点が差され、鎌倉初期国語アクセント資料としても有益な史料である。

◎内容◎

■本文編(影印「写真版」と模写で本文を掲載)

京都大学国文学研究室蔵本『俱舍論音義』

高野山大学図書館蔵金剛三昧院寄託本『俱舍論音義』

金沢文庫蔵本『俱舍論音義』(模写)

■論考編

高野山大学蔵本俱舍論音義について

金沢文庫本俱舍論音義について

京大転写本俱舍論音義のオ・ヲの仮名遣について

俱舍論音義の引用書について(一・二)

■索引編

和訓索引／京大転写本差声訓索引／京大転写本所引小切韻索引／京大転写本被反切注字索引／引用書一覧

にしざきとおる：武庫川女子大学教授を経て、現在京都女子大学教授。

訓点資料の基礎的研究

西崎亨著

▼A5判・五三〇頁／定価一八、九〇〇円

正倉院文書の国語学的研究

桑原祐子著

▼A5判・三〇〇頁／定価五、六七〇円

平安京とその時代

臈谷壽・山中章編

平安朝の研究を牽引してきた臈谷壽先生を中心に、京都に所縁のある研究者が、「平安京」をテーマに、歴史学・考古学・地理学それぞれの視点から意欲的なアプローチを展開した、総合論集。



〔執筆者〕

I 臈谷壽

清水みき

瀧浪貞子

竹居明男

田島公

西山良平

仁藤敦史

橋本義則

元木泰雄

吉水葉子

II 天野太郎

上原真人

梶川敏夫

鋤柄俊夫

杉本宏

山田邦和

山中章

安藤榮里子

山中恵美子

【最新刊】

▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

日本古代都市史研究

堀内明博著 古代王権の展開と変容

永年、平安京などの都市遺跡発掘調査に携わった著者の研究成果。王朝都市から中世前期都市まで、都城の展開と変容過程を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の成果を踏まえて解明した一書。

掲載図版多数



▼B5判・五一四頁／定価一五、七五〇円

御堂関白記全註釈

山中裕編

待望の
完結

本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。



- | | | |
|-------|------|-----------|
| 第1回配本 | 長和4年 | 定価六、三〇〇円 |
| 第2回配本 | 寛弘3年 | 定価五、七七五円 |
| 第3回配本 | 寛弘7年 | 定価五、七七五円 |
| 第4回配本 | 寛弘4年 | 定価五、七七五円 |
| 第5回配本 | 寛弘8年 | 定価六、八二五円 |
| 第6回配本 | 寛弘5年 | 定価五、二五〇円 |
| 第7回配本 | 長和5年 | 定価一一、〇七五円 |

【最終回配本・最新刊】

御堂御記抄

長徳4年～長保2年

▼A5判・二〇四頁／定価五、二五〇円

中世史科学叢論

藤本孝一著

平安博物館・京都文化博物館を経て文化庁主任文化財調査官を務め、永年史科学の現場で調査・研究に携わってきた著者が、40年の研究成果をまとめる。古文書学を中心にしながら、平安時代の政治・社会・文化から、中世・近世の史料考証におよぶ論考を収録。



▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

太子信仰と

天神信仰

武田佐知子編

信仰と表現の位相

時代を超えて、上下を通じた諸階層の篤い崇敬を得てきた、聖徳太子信仰・天神信仰の比較研究。各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史的、文学史的、宗教史、芸能史的研究を集成し、時代のニーズとともに変化する信仰の形態や、それに付随するイメージの付与、そして宗派や地域を越えて多面的に利用されるそれぞれの信仰の進化形について明かす。



聖徳太子摂政像

【5月刊行予定】

▼A5判・三四〇頁／定価六、八二五円

総論 (武田佐知子)

第一部 室町時代の紀行文に見る天神信仰・太子信仰／鶴崎裕雄／太子信仰と天神信仰 (高島幸次) 江戸時代の天神信仰・太子信仰と城下町金沢の文化 (濱岡伸也)

第二部 聖徳太子伝の史料的人格 (下鶴隆) 拡散する聖徳太子伝承 (松本真輔) 唐本御影の伝来過程をめぐって (伊藤純) 地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』 (榎原小葉子)

第三部 菅原道真の仏教的言説とその継承 (稲城正巳) 北野聖廟和歌・連歌とその功德 (脇田晴子) 正面向きで直立する異色の束帯天神画像について (松浦清) 菅生天満宮所蔵・掛幅形式の天神縁起絵について (鈴木幸人) 越前国敦賀郡の天神信仰・序説 (竹居明男)

奈良朝人物列伝

『続日本紀』薨卒伝の検討

林陸朗著

〔掲載人物〕

道昭和尙／道首名／道慈法師／僧玄昉／行基和尙／多治比広足／光明皇后／巨勢閑麻呂／紀飯麻呂／石川年足／鑑真和上／藤原弟貞／藤原仲麻呂／坂上犬養／和氣王／藤原豊成／藤原真橘／百濟敬福／上道正道／山村王／高丘比良麻呂／大和長岡／文室淨三 他

【5月刊行予定】

▼A5判・四四〇頁／定価七、三三〇円

房総風雅史

古代・中世編
―大和心の源流をたずねて―

小倉光夫著

日本人が嗜む和歌や茶道の根底にある「大和心の源流」はどこから来たのであろうか―古墳時代から室町時代まで、房総の歴史を「風雅」という切り口で見直した「新しい房総の文化史」。『房総風雅史―茶の湯の姿をもとめて』の続編

【5月刊行予定】

▼A5判・三二〇頁／定価五、九八五円

東アジアのなかの日本

上田正昭著



折口民俗学を継承する著者の昨今の論文や講演録などを選んで収録。海を媒介とするアジアとのかわり、とりわけ東アジアとの関係を重要なテーマとしてきた著者がまとめた最新の一書。

▼四六判・三七六頁／定価二、五二〇円

京都の都市共同体と

権力 思文閣史学叢書

仁木宏著 「5月刊行予定」

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなから町の成立を読み解く。自力救済社会における武家と都市民の対峙が、やがて公儀を創出し、都市共同体を確立させることを明らかにする。中近世移行期における自治、共同体、権力の葛藤を正面から見すえ、都市の本質を具体的、理論的に分析した一書。

▼A5判・三三〇頁／

定価六、六一五円

京都 芸能と民俗の文化史

山路興造著

芸能史研究の第一人者が、祇園御霊会や大念仏狂言、六斎念仏、賀茂社の御戸代神事、盆踊りなど京都の芸能民俗史の歴史の実態を、資料のなかで検討しな

▼A5判・三六八頁／定価七、八七五円



序論 中世都市研究と京都

第一部 室町・戦国時代の都市

社会

中世後期の都市構造

自力救済社会と都市の「平和」
人的ネットワークの展開

第二部 都市共同体と公儀

都市共同体の確立と展開

都市共同体の発展と室町幕府

三好・織田政権の都市支配論

豊臣政権の「政道」と都市共同体

惣町・町組の形成過程

をめぐって

第三部 「首都」としての京都

都市構造の変容

都市の惣構と「御土居」

結論 京都研究と中近世移行論

にきひろし：一九六二年大阪府生。京都大学大学院文学研究科博士後課程修了。大阪市立大学大学院文学研究科教授。京都大学博士（文学）。

中世京都の空間構造と

礼節体系 【最新刊】

桃崎有一郎著

貴人と牛車ですれ違う場合の正しい作法は？参内するときはどこで牛車を降りればよいのか？

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。



第一章 中世公家社会における路頭礼秩序

——成立・沿革・所作——

第二章 中世武家社会の路頭礼・乗物と公武の身分秩序

第三章 中世洛中における街路通行者と第宅居住者の礼節的関係

——門前・第宅四面と広義の路頭礼——

第四章 中世里内裏の空間構造と「陣」

——「陣」の多義性と「陣中」の範囲——

第五章 中世里内裏陣中の構造と空間的性質

——公家社会の意識と「宮中」の治安——

第六章 中世における朝儀出仕と里内裏周辺空間秩序

——陣中・陣家・外直廬と乗車忌避——

第七章 陣家出仕の盛行と南北朝・室町朝儀体系の略儀化

第八章 「裏築地」に見る室町期公家社会の身分秩序

——治天・室町殿と名家の消長——

第九章 中世後期身分秩序における天皇と上皇・室町殿

——身分尺度としての陣中・洛中の分析から——

第十章 裏築地の起源・沿革・終焉と中世の里内裏

補論 内裏・院御所・京都論の動向と陣中・裏築地論の論点

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

桃崎有一郎：一九七七年東京都生。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程修了。立命館大学文学部京都学プログラム講師。博士（史学）。

武士と騎士 日欧比較中近世史の研究

小島道裕編



人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」の一環として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。具体的な資料に基づき、多様な視点から武士と騎士をとりあげた論考19本を収録。

【最新刊】

I 領主と武力

城と領主権
西欧中世における貴族・騎士と封建制
中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢
日欧甲冑比較論序説
出陣図屏風に描かれた近世軍制

エリック・ブルナゼル (パリ第2大学)
渡辺節夫 (青山学院大学)
堀越宏一 (東洋大学)
近藤好和 (國學院大学ほか非常勤講師)
笠谷和比古 (国際日本文化研究センター)

II 城の形と機能

中世における城
アンヌマリ・フランバール・エリシエ (元ルーアン大学)
中世西欧地中海沿岸地方の農村部における城と定住
エチエンヌ・ユベール (国立社会科学高等研究院)
日本中世における城と領主権力の二面性
井原今朝男 (国立歴史民俗博物館)

日欧城郭比較論

III 資料とイメージ

城における領主を描いた中世の図像
ペリーヌ・マヌ (国立科学研究センター CNRS)
洛中洛外図屏風と描かれた公武関係
頼朝のイメージと徳川將軍
日本中世における「武家文書」の確立過程とその諸相
中・近世武家書札の文化史
マルクス・リュッターマン (国際日本文化研究センター)

IV 理念と言説

近世武家の年中儀礼と言説
旧幕臣と武士道
「武士道」研究の現在
資源化される歴史
おわりに

中世を比較する

ミシエル・コラルデル (元ヨーロッパ地中海文明博物館)
ビエール・スイリ (ジュネーブ大学)

▼A5判・五一二頁／定価九、四五〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

長崎奉行の司法的権限を明らかにするとともに、近世都市長崎の司法体制を解明。

▼A5判・五一二頁／定価五、九八五円

松前景広『新羅之記録』の

新藤透著

史料的研究

▼A5判・五一八頁／定価二二、六〇〇円

江月宗玩 欠伸稿訳注 (全2冊)

芳澤勝弘編著

全2冊完結!



江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施す。分量的には、写本「孤蓬庵本」のほぼ半分だが、「孤蓬庵本」にはない偈頌等を収録。江月の人柄を示すとともに、多くの文化人との交流を記録している。文化人の消息を窺う貴重資料ともなっている。

【最新刊】

▼A5判・七七〇頁／定価九、九七五円
▼A5判・六四四頁／定価九、九七五円

悟溪宗頓 虎穴録訳注

芳澤勝弘編著

妙心寺派四派の一つ東海派の祖であり、瑞龍寺開山である、悟溪宗頓（一四一六～一五〇〇）の語録『虎穴録』を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施した。

▼A5判・八四四頁／定価一〇、五〇〇円

瑞泉寺史

横山住雄著

応永二十二年（1415）日峰宗舜の開創にかかる臨濟宗妙心寺派の重要寺院・青龍山瑞泉寺（愛知県大山市）の歴史を三部構成で伝える。

【内容】

通史編 瑞泉寺の概要／中世の瑞泉寺／永祿のお災禍と復興期／近世の瑞泉寺／独住時代の瑞泉寺

伽藍・塔頭編 伽藍／塔頭／旧末寺・末庵

史料編

中世史料／近世史料／史料等写真「瑞泉寺入寺開堂法語」（龍濟寺蔵本）／「青龍史考」（抄）（可山禅悦／謙宗正道）等

▼A5判・五七〇頁／定価二一、〇〇〇円

お詫び…前号で瑞泉寺の所在地を誤って岐阜県といたしました。正しくは愛知県です。お詫びして訂正いたします。

法然上人絵伝集成シリーズ (既刊3冊)

1 本朝祖師伝記絵詞 (善導寺本)

▼A4判・二〇二頁／定価八、四〇〇円

2 法然上人伝絵詞 (妙定院本)

▼A4判・三二〇頁／定価一三、六五〇円

3 拾遺古徳伝絵 (常福寺本)

▼A4判・三九二頁／定価一八、九〇〇円



法然上人の生涯を描いた絵伝を、オールカラーの大型写真版で掲載。本物が持つ臨場感や風合いに触れることができる画期的企画。全巻の詞書を活字化、佛教大学教授中井真孝氏による解説を付す。発行浄土宗 製作・販売 思文閣出版

本書は直販扱いです。書店様でのご注文はできませんのでご了承下さい。

続々日本仏教美術史研究

中野玄三著

仏教美術史研究三部作の最新刊。五十年に及ぶ中野美術史学の集大成。

▼A5判・八二〇頁／定価一七、八五〇円

藤村庸軒年譜考 (全2冊)

白奇顕成著

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歳ごとに明かした異色の年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力を余すところなく伝える一書。

▼A5判・総一八四八頁／定価三六、七五〇円

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書 第17冊

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流

大阪経済大学日本経済史研究所編

【最新刊】

国際的な研究の発展と交流を目指して行われた第一回東アジア経済史研究会「近世・近代の東アジア経済史研究」(二〇〇七年・大阪経済大学日本経済史研究所主催)の成果10篇を収録。東アジア史研究のさらなる発展の芽を宿す一書。



【内容】

漢代財政監督に関する研究 朱徳貴(哈爾濱商業大学経済史研究所)
中国漢民族居住地域における宗族集住の地域差

近世日本中国朝鮮における貨幣経済化比較史試験 王詢(東北财经大学経済学院)
岩橋勝(松山大学経済学部)／李紅梅(松山大学大学院研究員)

砂糖菓子からみた近世日中間の境界領域 熱美保子(大阪経済大学日本経済史研究所)
近代日清関係の形成——一八六〇—七〇年代——

閩立(大阪経済大学経済学部)
ミシンのグローバル性と東アジアの衣服産業

岩本真一(大阪経済大学日本経済史研究所)
植民地期共同体の規範の移植——朝鮮の山林管理と日本の入会制度——

李宇衍(落星臺経済研究所)
第一次世界大戦と朝鮮貿易

宋圭振(高麗大東洋学研究所)
天津と仁川を通じてみた開港場貿易の発展と近代都市の成長

姜京洛(江南大学)
購買力平価による日中韓経済比較

梁炫玉(大阪経済大学日本経済史研究所)
▼A5判・三二八頁／定価四、二〇〇円

別府大学文化財研究所企画シリーズ②「ヒトとモノと環境が語る」
キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編
異なる研究領域の成果を融合し、新たな研究方法を提示する一書。

▼B5判・一七八頁／定価三、九九〇円

住友史料叢書

(既刊24冊・第五期刊行中)

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編集

▼A5判・平均四〇〇頁／定価各七、八七五—一、〇二五円
《最新第24回配本…銅版方要用控二 定価九、九七五円》

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その歴史的要因、
経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。

▼A5判・三六四頁／定価七、一四〇円

日本の朝鮮・台湾支配と

松田利彦・やまだあつし編

植民地官僚

国際日本文化研究センターでの共同研究の成果21篇。

▼A5判・七五六頁／定価一三、六五〇円

立憲国家中国への始動

曾田三郎著

明治憲政と近代中国

従来の単線・単純な中国近代史の現状を打開すべく、立憲国家中国の形成と
いう観点から叙述する。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、四〇〇円

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

*明治維新以降、めざましい発展を遂げてきた近代化の歩みを支えた産業技術の変遷を跡づけ、日本の産業技術史を俯瞰する。

*「日本の近代」の理解において不可欠でありながら、従来必ずしも系統的・組織的に実施されてこなかった日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を34の小項目としてとりあげた。

*大項目には3ないし4頁の総説をおき、日本産業技術の流れを把握することができる「読む事典」。



*総説中にゴシックで取り上げた関連する重要項目を小項目として配列し、個別項目に関する知識を分野全体の展望との関連において示す。

*近代化以前からの「草の根」における技術と技能の蓄積に対し光を当て、民間の「現場」の力を重視。

▼B5判・五五〇頁／定価二二、六〇〇円

原三溪翁伝

三溪園保勝会
横浜市芸術文化振興財団 編

藤本實也著

原三溪（一八六八～一九三九）は、生糸貿易や製糸業で活躍した横浜の事業家。美術・茶道に造詣が深い文化人・パトロンであり、広大な私邸を三溪園として一般公開し、関東大震災後の横浜の復興に尽くすなど、社会事業家としても活動した。藤本實也が戦時中にとり、稿本のままで活字化されていなかった幻の原稿「原三溪翁伝」を、横浜開港一五〇周年を記念して、校訂を加えて刊行。

▼A5判・九三六頁／定価一六、八〇〇円

文人世界の光芒と

古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

※水木要太郎（一八六五～一九三八）は、明治後半から昭和初期、奈良女子高等師範学校教授、奈良帝室博物館学芸員などを歴任。一方で、大和の歴史・考古・地誌の研究活動を進め、大和古寺の瓦や経典・中・近世文書、典籍や写本のほか、近世の刊本・刷り物や絵地図・暦本・著名文化人の書簡などを収集した。

※本書はこの水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的共同研究の成果。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一編

〔執筆〕井波律子・池内紀・白幡洋三郎・猪木武徳・細川周平・平松隆円・佐伯順子・井上章一・鈴木貞美・岩井茂樹・劉建輝（収録順）

▼A5判・三二八頁／定価五、二五〇円

光芒の大正

川内まごころ文学館蔵
山本實彦関係書簡集

改造社関係資料研究会編
時代の寵児となった雑誌『改造』を創刊した山本實彦。川内まごころ文学館所蔵の山本實彦または改造社宛に届いた書簡のうち、『改造』が最も華々しく光り輝いた大正8年から昭和5年までの書簡を詳細な解説とともに活字化。

▼A5判・二九〇頁／定価五、二五〇円



知の伝達メディアの 歴史研究

辻本雅史編
教育史像の再構築

「教育」を「知の伝達」ととらえ直し、その伝達のための媒体を「メディア」と規定することで、これまでのような、学校を中心とした教育史像ではなく、学校を含みながらも、学校を越えたところでもなされる人間形成の営みを、全体としてとらえなおす視点を提示する。



【最新刊】

▼A5判・三〇〇頁／定価五、九八五円

西村茂樹研究

明治啓蒙思想と国民道徳論

真辺将之著

明治の啓蒙思想家・道徳運動家である西村茂樹の思想について、従来の「保守」と「進歩」という二項対立的な枠組みから脱却し、時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を、史料に基づいて跡づけることにより明らかにする。



▼A5判・五〇〇頁／定価八、一九〇円

韓国「併合」前後の 教育政策と日本

本間千景著
佛敎大学研究叢書

●本書は第二次日韓協約から第一次朝鮮教育令発布後の期間に着目し、当該期の修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育を取り扱う。

●朝鮮民衆の様々な対応と抵抗により、日本側の植民地教育政策がどのような変容を迫られたのかを明かす。教育という観点から、日本内地と旧韓国・朝鮮の関連を再考。

【最新刊】

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

ほんま・ちかげ：

一九六〇年生まれ。佛敎大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得満期退学。博士(文学)。佛敎大学、京都女子大学非常勤講師。

増補・改訂 西村茂樹全集

全12巻

古川哲史監修・日本弘道会編

西村の学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道徳論』の初版本など思想的にも貴重な著書が初めて公刊される。道徳学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髄に迫る。

【最新刊・第8回配本第10巻】

▼既刊8冊・揃定価一四八、〇五〇円



西村茂樹

一九二〇年代東アジアの文化交流

大手前大学比較文化研究叢書 6

川本晴嗣(大手前大学学長・上垣外憲一(大手前大学教授)編)【最新刊】

海外交流が新たな展開を見せた一九二〇年、西洋という価値は相対的となり、東洋回帰も日本の芸術家たちにとって、もう一つの選択肢となってくる。日本の伝統文化に対する西洋人・東洋人のまなざしも、幕末明治期の異国趣味とは一線を画するようになる。未開拓の部分も多い東アジア文化交流の様相を、当該各国の研究者を結集し、明らかにする。

◎内容◎

第一章 小説・小説家の交流

一九二〇年代の上海における日中文化人の交流
谷崎潤一郎『日本に於けるクリツブン事件』
一九二〇年代韓・日文学交流の模様

趙 怡
松村昌家
金 春美

第二章 詩をめぐる交流

白鳥省吾『地上楽園』と金素雲『朝鮮の農民歌謡』

上垣外憲一
古田島洋介

第三章 戯曲・演劇の交流

大正戯曲の再検討
中国の早期話劇と日本の新劇
中国における『サロメ』

Cody Poulton
陳 凌虹
周 小儀

▼A5判・二二〇頁／定価二、九四〇円

大手前大学比較文化研究叢書 既刊

1 谷崎潤一郎と世紀末

2 視覚芸術の比較文化

3 ヴィクトリア朝英国と東アジア

4 夏目漱石における東と西

5 阪神文化論

▼A5判・二〇八～二九〇頁／定価二、九四〇円、三六〇円

中国語圏における厨川白村現象

くりやがわはくそん

——隆盛・衰退・回帰と継続——

工藤貴正著

【最新刊】



日本で大流行しながら、現在では忘れ去られている厨川白村(1880-1923)の著作が日本でのような評価を受け、大陸・中国の民国文壇の知識人にどのように受容されたのか、また、翻訳された厨川文体の特徴とは如何なるものだったのかを基本的資料を示しながら考察。さらには、同じ中国語圏である台湾・香港での諸相や、1980年以降、大陸・中国で彼の著作が再び熱く受容されている現状に考察を加える。厨川白村を軸とした日中台の文学交流史。

▼A5判・三八〇頁／定価六、三〇〇円

くどう たかまさ…一九五五年生まれ。大阪外国語大学大学院修了後、北京師範大学留学。現在愛知県立大学教授。博士(文学)。

漱石文学の水脈

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

【最新刊】

漱石の文学がどのような思想と背景のもと生み出されたのか、また日本を含む東アジア文化圏においてどのように受け入れられ、どのような影響を与えてきたかを検証する10篇。

▼四六判・二八〇頁／定価二、九四〇円

漱石と世界文学

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

漱石が世界文学を意識し、多大な影響を蒙った検証だけでなく、その後の世界文学に与えたインパクトをも見極めた9篇。

▼四六判・二六二頁／定価二、九四〇円

船簞笥の研究

小泉和子著

近世海運において船乗り達が船内に持ち込んで使っていた収納家具、船簞笥。本書はその成立から終息までを歴史的に考察し、デザインの形成を検証の上、その本質を明らかにする。様式史としてはなく、船簞笥自体を歴史を語る史料として試みた意欲的な一書。

(口絵カラー4頁・モノクロ4頁
図版篇写真二〇四点掲載)

【5月刊行予定】

▼A5判・四〇〇頁／定価六、三〇〇円

こいずみ・かずこ

一九三三年生。東京大学建築史研究室で日本家具・室内意匠史を研究し工学博士号。昭和のくらし博物館館長。家具道具室内史学会会長。

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様 信多純一著

江戸時代から近江大津にて作られ、土産として全国で愛された民画・大津絵。その多彩な信仰、祈り、教訓、遊びの「画題は、人々の想念の数々を端的に映し出す」その起源・絵馬との共通点・画題の意味などを考察し、多数の図版で解説した全大津絵事典。

▼B5判・一七八頁／定価三、六七五円



第一章 船簞笥とは何か

第二章 船簞笥の様式形成と豪華形の出現

第三章 船簞笥の地域的差異と産地

第四章 豪華形船簞笥と北前船



応用美術思想 導入の歴史

天貝義教著

応用美術とは、工芸美術・装飾美術・デザインを表す概念である。その思想が明治期日本でいかに学習され、美術・工芸界において指導的役割を果たしたかを解明。

【最新刊】

▼A5判・四〇〇頁／定価七、八七五円

あまがい・よしのり…一九五八年生まれ。秋田公立美術工芸短期大学教授。

革新の書人 河東碧梧桐

島田三光著

子規の高弟である碧梧桐のコレクションでは第一人者であり、書家としても活躍中である著者。そのコレクションを通して碧梧桐の書を紹介。



▼A4判・二一〇頁／定価五、二五〇円

茶の湯文化と小林二三

逸翁美術館編

特別展の展覧会図録。小林二三の世界を「茶道との出会い」「逸翁の茶懐石」「逸翁と茶友」「逸翁の茶道観」「逸翁の愛した茶道具」5つのテーマ、オールカラーで紹介。

▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円



ウィーン博参同より

意匠条例制定まで



国際デザイン史

日本の意匠と東西交流

デザイン史フォーラム編

一九九九年・二〇〇〇年に開催された「国際デザイン史フォーラム」(大阪大学大学院文学研究科美学研究室主催)をもとに、デザイン史における日本と西洋諸国との交流を探る56篇を収める。

「4刷出来」

▼A5判・三〇四頁／定価三、〇四五円

アーツ・アンド・クラフツと日本

デザイン史フォーラム編(藤田治彦責任編集)

アーツ・アンド・クラフツ運動と日本との関わりをさまざまな視点から論じ、デザイン・工芸・美術・社会・産業・環境・生活などの立体的な関係を考察する一助とする一書。

▼A5判・三〇四頁／定価三、〇四五円

近代工芸運動とデザイン史

デザイン史フォーラム編(藤田治彦責任編集)

「近代工芸運動」という視点を導入することにより、「近代デザイン史」という視点では抜け落ちている、各国における芸術分野での歴史・重要な動向を様々な点から解き明かす。

【内容】第一部 ヨーロッパの近代工芸運動／第2部 欧米の近代工芸運動とアジア

▼A5判・三三六頁／定価三、〇四五円

バーナード・リーチ再考

スタジオ・ポタリーと陶芸の現代

エドモンド・ドウ・ヴァール著

金子賢治・鈴木禎宏解説／北村仁美・外館和子訳

ロンドンで活躍する気鋭の陶芸家による批判的リーチ論を通じて、陶芸史におけるリーチの位置、現代陶芸の意味を探る。

▼A5判・二九八頁／定価五、〇四〇円

風俗絵画の文化学

都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

中世から近世の風俗絵画のメディア性に着目し、そこに描かれなくなったものの持つ意味や享受者の視点、聖と俗の姿、風俗絵画に表された芝居空間や行事のかたち年代とともにどのように姿を変えたのか、など様々な視点からアプローチする。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

御用絵師が官位官職制度の中どのように組み込まれていたのか、時の為政者は職能集団たる絵師の組織をどのように編成、掌握していた等を論じる。

▼A5判・四五八頁／定価七、八七五円

正倉院展六十回のあゆみ

奈良国立博物館編集・発行

秋の風物詩である正倉院展の歩みを、各回の主な出陳宝物の図版や特徴・エピソード・出陳・覧などのデータと、各分野の研究者によるエッセイでたどり、毎回の図録に付されている用語解説を整理・集大成して巻末に付す。

▼A4判・二八六頁／定価三、一五〇円

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院研究の現在、八世紀の東アジア文化、宝物の保存・伝承の3つのテーマで報告・討論。正倉院宝物の精粹がわかる一書。

▼四六判・四三八頁／定価三、一五〇円

緒方洪庵

——幕末の医と教え——

中田雅博（産経新聞文化部記者）著

生誕200年記念



失われた医のモラルを問う

日医ニュース（日本医師会）ほか各紙で紹介されました

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円

●目次●

- I 洪庵の修業時代
 - 一 医師になりたい
 - 二 天文・物理を学ぶ
 - 三 医学・薬学を学ぶ
- II 適塾と緒方メース
 - 一 幕末という時代に
 - 二 塾生の生活
 - 三 教育者・洪庵
 - 四 塾生の母・八重
- III 蘭学医として
 - 一 洪庵はどんな医師か
 - 二 西洋医学書を翻訳する
 - 三 医療倫理を示す
 - 四 天然痘との戦い
 - 五 コレラとの戦い
 - 六 洪庵、江戸へ行く
- IV 適塾の群像
 - 大村益次郎／武田斐三郎
 - ／渡辺卯三郎／佐野常民
 - ／杉亨二／大島高任／橋
 - 本左内／大島圭介／長与
 - 専斎／福沢諭吉／野村文
 - 夫／高松凌雲
- 付属資料
 - 緒方洪庵年譜
 - 緒方洪庵の著書・翻訳書
 - 等一覧
 - Duties of Physicians
 - [扶氏医戒之略の英訳]
 - 適塾門下生一覧

九州の蘭学 越境と交流

ヴォルフガング・ミヒエル・鳥井裕美子・川嘉真人編

長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異なる西洋近代科学に向き合い学び取ったのか、あるいは来日した西洋人が、知的交流や技術移転にどれほど貢献したのかを、最新の研究成果に基づき、彼らの業績と足跡を通して明らかにする。

▼四六判・三八〇頁／定価二、六二五円

広瀬旭莊全集 詩文篇（全1冊）

岡村繁・井上敏幸編

江戸末期折衷派の儒者・広瀬旭莊の顔でもある詩文を収める。広瀬先賢文庫所蔵の著書・文書・書簡の類を全て網羅する全集の待望の最新刊。

既刊日記篇（全9冊）・随筆篇（全1冊）

▼B5判・八六二頁／定価三一、五〇〇円
揃定価一四九、一〇〇円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



思文閣出版古書部では、通常、博物館や資料館、図書館などで見られない本、いわゆる稀覯書も数多く扱っています。次に紹介する本もそのような本です。

『解体新書』は、わが国最初の本格的西洋解剖書の翻訳本です。安永三年（一七七四）八月、江戸書肆・須原屋市兵衛より刊行されました。

原書はドイツの医師ヨハン・アダム・クルムス (Johann Adam Kulmus) の『解剖図表』*Antonomische Tabellen* (一七三二) のオランダ語訳 *Ontleedkundige Tafelen* の一七三四年版で、翻訳は前野良沢・杉田玄白を中心に、中川淳庵・石川玄常・桂川甫周ほか数名の協力でなされました。

◆ 解体新書 ◆

序図一冊および本文四巻の五冊で構成され、序図巻は、吉雄耕牛と玄白訳の原著者序文、次いで凡例を載せ、その後、解剖図を二十一葉にわたって掲げています。解剖図は、秋田藩士小田野直武の手になるもので、銅版の原画を見事な筆致で再現しています。一方、本文四巻はすべて漢文で記され、送り仮名および返り点が付刻されています。

弊社の『解体新書』は、表紙に浸み・ヨゴレがみられるものの、五冊全てに元題簽を残しており、当時の姿を今によく伝えています。我が国蘭学の最たるものとして、その価値は極めて高いといえます。

（思文閣出版古書部・中村知也）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL (075)531-0001 Fax (075)561-4386
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

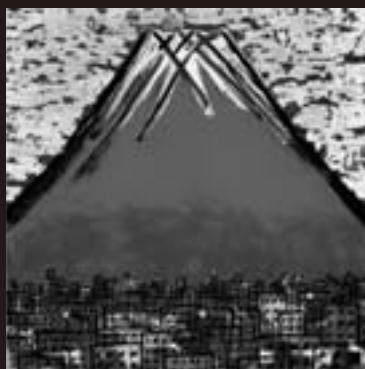
※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



奈良
絵
本地
巻中・下
二帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町357
☎(075)752-0005 Fax.(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣美術館 次回展のご案内



開館三十五周年記念特別展
木田安彦の世界
「富士百観とふるさとの名山」展

ガラス絵／街風富士 2007年

2010年4月24日(土)－8月1日(日)

休館日 月曜日(但し、5/3・7/19は開館)・7月20日

京都市左京区田中関田町2-7
☎(075)751-1777 Fax.(075)762-6262
<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>
e-mail artm@shibunkaku.co.jp

思文閣会館ご使用の案内



2F フリースペース
展覧会や講演会など



3F 多目的ホール
会議や勉強会、趣味のお稽古場、ちょっとしたお集まりなど

B1F テナント募集中

飲食店や雑貨店、
倉庫などにご利用いただけます。

京都市左京区田中関田町2-7
お問い合わせは左記思文閣美術館まで